

氏名(国籍)	ばく 朴	うん 恩	ひ 姫(韓国)
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第3027号		
学位授与年月日	平成15年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	延慶本『平家物語』における〈王権〉のありよう —歴史から物語へ—		
主査	筑波大学教授		名波弘彰
副査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		稲垣泰一
副査	筑波大学講師	博士(学術)	秋山学
副査	筑波大学教授	文学博士	今井雅晴

## 論文の内容の要旨

本論文は、治承・寿永内乱期の〈治天の君〉であった後白河院が、延慶本『平家物語』のなかでいかなる帝王として登場するのか、その後白河院像の分析を通して、後白河院の院政が担う〈王権〉の問題を核にして院近臣や悪霊との関係を明らかにするとともに、さらには構想論に至ろうとするものである。

本論文は二部構成になっている。第Ⅰ部「後白河院とその近臣たち」では、〈驕れる院近臣〉と後白河院との関係を中心に、第Ⅱ部「〈王権〉をおびやかす異界存在—怨霊・天魔・天狗—」では、怨霊や天狗といった異界存在と住吉大明神を介しての後白河院との関わりを中心に考察されている。論文の構成は、以下の通りである。

### 【本論文の構成】

#### 序章

#### 第Ⅰ部

第一章 鹿谷陰謀事件—歴史と物語のはざま—

第二章 法住寺合戦—知康と義仲の〈ヲコ〉性の反転をめぐる—

第三章 後白河院と院近臣

#### 第Ⅱ部

第四章 成親怨霊と後白河院

第五章 後白河院と天狗—「法皇御灌頂事」を中心に—

第六章 崇徳院説話と後白河院—崇徳院怨霊譚の物語化の問題をめぐる—

#### 結章

第一章では、後白河院と院近臣の関係を延慶本『平家物語』がどう捉えていたのかを考察している。本章が取り上げる院近臣は藤原成親である。未遂に終わった鹿谷陰謀事件を対象に、成親に見られる〈驕れる院近臣〉像および〈ヲコ〉としての役割について分析している。とりわけ、後白河院を中心とする院政対平家という事件の構図が、この物語では成親対清盛に焦点がずらされている点に着目し、そこに意図されている後白河院の後景化の問題と、それとは逆に、成親の私怨の前景化が関連づけられているとし、〈王権〉の維持のために後白河院の身代わりとなって成親が追放されるというプロットに潜在する王権構造が検討されている。

第二章では、第一章と同じく後白河院と院近臣の関係が、ここでは平知康（鼓判官）を対象に考察されている。院方の惨敗に終わった法住寺合戦に関する叙述には、平知康と源義仲のヲコの造型の反転が認められること、そしてその反転がいかなる意味をもっているのかが考察され、ヲコに対する〈笑い〉の背後に隠れている〈王権〉の論理が明らかにされている。

第三章では、前二章で取り上げた事件と合戦に共通する王権構造から、総合的に後白河院の〈王権〉の問題があらためて考察されている。ここでの考察では、後白河院の〈王権〉の至高性を語ろうとする指向性と、それにもかかわらず、顕在化する〈負〉なる部分とがまず追求され、その相反するベクトルがいかに衝突し、亀裂をもたらしているのかが考察されている。それによって、混沌をもたらす朝敵としての清盛・義仲像と、負性を担う〈ヲコ〉たる人物としての成親・知康像が交差するなか、いかに後白河院が理想の帝王として造型されているのかが明らかにされている。

第四章では、鹿谷陰謀事件の主謀者である成親の異常な死や怨霊としての発現、そして成親怨霊の威勢やその限界について考察されている。特に、成親怨霊の限界が崇徳院怨霊との比較を通して明らかにされている。また、建礼門院御産記事を取り上げ、成親怨霊を鎮める後白河院像に着目し、怨霊と後白河院との関係を通して悪霊と〈王権〉の関係が構造化されている。

第五章では、後白河院の灌頂にまつわる記事が〈顕〉と〈冥〉の二元論的世界観に立って分析されている。まず「天狗問答」の分析を通して、主に山門の大衆と結びつけられている天狗が反仏法・反王法的悪霊の特徴をもっていることが指摘されている。そして〈顕〉としての〈王権〉の秩序を壊そうと狙う天狗たちと、その危機から日本国を救おうとする後白河院が天狗と対抗するために灌頂を成し遂げることが「天狗問答」の意図であることが明らかにされている。次にこの天狗と清盛の悪行（乱世）との関わりに論述が展開され、〈蓮如の夢〉が考察の対象になり、そこでは清盛の悪行が天狗を媒介にして崇徳院怨霊と結びつけられる構造が捉えられている。

第六章では、第五章の〈蓮如の夢〉の分析を踏まえて、後白河院にとって最大の危機である治承・寿永の内乱を惹き起こした動因が追求されている。それによると、清盛の悪行が崇徳院怨霊と結びつくのは天狗を媒介としていることを踏まえて、さらにその上に崇徳院怨霊が治承・寿永内乱に至るさまざまな事件や天災と清盛の悪行とを結びつける役割を担っていると結論づけられている。こうして崇徳院怨霊（天狗）は天災と乱世の原因として後白河院と対峙するのだが、この対峙の構造が延慶本『平家物語』始発部の構想とされていると指摘されることになる。この天災と乱世を招く強力な悪霊である崇徳院怨霊〈天狗〉と対抗して〈王権〉を担うために、後白河院が理想的なく治天の君として造型されているとしている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、第Ⅰ部の後白河院の〈王権〉と院近臣の関係、第Ⅱ部の後白河院の〈王権〉と異界存在との対決を追求することで、頼朝挙兵以前までの『平家物語』の構想を捉えようとしたものである。このような構想論研究は延慶本『平家物語』研究の近年の動向を踏まえるものである。

『平家物語』諸本の中で、延慶本『平家物語』が古態性本文を多くもつことは、従来から実証されてきた。その点で、『平家物語』の成立過程を究明する上で、このテキストのもつ位置がかねてから学界で注目されてきたが、個別の編年記事研究や説話生成論などでは大きな成果を上げてきてはいても、それら個別の編年記事や説話が総体としてどのような構想の下にあるのかは、いまだ通説を得ていないのが現状である。延慶本『平家物語』を構想論的観点から究明する場合、それを大きく三部に分けて考察する必要がある。すなわち治承・寿永の内乱を題材とする合戦叙述を中間部とし、それ以前を始発部、合戦の後日談を終局部として考えるのがそれである。そしておそらくこの三部のうち始発部と終局部に照応が認められるならば、延慶本『平家物語』に固有の構想が見出されるものと考えられる。

本論文は、そのうち始発部の構想を、〈王権〉の構造と清盛の悪行、その対決を媒介する怨霊や天狗といった三者の対決構造から明らかにしようとしたものである。始発部は安元二年から治承四年八月の東国における頼朝挙兵に至るまでの編年記事群であり、その記事群の間にどのような構想が認められるのか、これまでさまざまな論考が提出されてきた。本論文は、その編年記事中の安元三年の山門騒動から鹿谷陰謀事件に至る過程、さらにそれらの事件によって顕在化した後白河院と清盛の対立が治承三年十一月の清盛による廟堂刷新のクーデターを惹起する史実、これらを〈王権〉・院近臣・清盛の悪行・悪霊といった構成要素の分析を通して編年記事と説話をつらぬく構想を捉えることに成功している。

さらに本論文は、乱世の中で後白河院の院政が、保元・平治以降の清盛や、寿永二年七月に上京した義仲との対決によって何度も危機に遭いながらも、なぜ存続しえたのかという問題を提起する。そしてその問題もやはり前述してきた王権構造から解釈している。とりわけ、成親・知康といった院近臣が後白河院の帝王としての負性を引き受けるかたちで〈周縁〉へと追放されると捉えることで、彼らが後白河院の〈王権〉の浄化作用を担う役割を負わせられる存在であったという結論は、後白河院政が存続しえた理由として納得させられる立論となっている。

本論文は、以上の構想論的分析によって、史実から構成される後白河院政史と、物語が語る後白河院の王権構造と乱世との関わりが、いかに異なるものであるかをも明らかにしている。そのために、歴史学が文学を歴史史料としてとり扱う際の限界を示してくれてもいる。その点でも学界に寄与するものである。

ただ章ごとの論述には、時として問題意識の大きさゆえか、分析能力がそれに追いつかない点も見受けられることが惜まれる。たとえば、「天魔」の登場を、従来の怨霊や天狗と異なる悪霊として位置づけようとしているが、その異神性を十分には納得させることができていない。確かに、「天魔」は院政期に登場した新たな異神のだが、その性格の究明には、さらなる史資料の収集や異神と乱世の関係の行き届いた分析が必要なのだが、本論文はその点が欠けている。このような史資料の乏しさや分析の不足は、その他にも後白河院と芸能の関係、あるいは院近臣が院の帝王としての負性を引き受ける構造解釈にも及んでいることが惜まれる。ただそのことは、現在の学界の限界を示すものであって、むしろ著者は、その限界に挑んで延慶本『平家物語』の構想を明らかにしていることは確かである。

以上を総括すれば、個別の分析と史資料収集に若干の物足りなさがあることは否めないとしても、延慶本『平家物語』の構想論研究に関する成果には大きな評価が与えられる。したがって関連史資料の収集と分析の一層の充実は、本論文で方向性が確立した今後において、著者の明確な研究課題としてその研鑽に託すべきものと信ずる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。